

# 中国篆書書風の江戸時代日本への展開

——「江戸文字」を中心に——

曹悦\*

## はじめに

江戸時代の日本と中国は、中国から長崎への貿易船による海上貿易が頻繁に行われ、仏教文化などの交流も盛んであり、中国の商人、僧侶などが唐船に搭乗して日本に着き、物資や文化なども日本が受け入れることになった。中国書法の日本での浸透拡大は、主に中国風の影響を受けて六朝本、楷書、行書などが一世を風靡し、篆書はある意味で未知の書法であったが、清朝が篆書法を受容するとともに再興することで、日本篆書書法の発展に大きな影響を与えた。日本では、徳川家康が創始した江戸幕府は、その文教政策の推進によって、書法の革新風潮が勃興し、中国流の唐様と日本の伝統的な和様が現れた。

江戸時代には、「御家流」から一般的な庶民の学書を設けた教育機関「寺子屋」まで、書道芸術は上流階層から庶民階層にいたるまで普及していた。これによって、唐様書道は、後代の日本の書道の発展の中で、徐々に主導的な地位を占めることになる。日本の江戸時代はちょうど中国の清代にあたるが、篆書が復興し、文人と学者の両方の視野に包含されることで、適切な継承と伝播を成し遂げた。唐様書道の一部として、篆

書は弁識度が低く、実用性が弱い特徴があるが、それにも拘わらず、江戸時代から本格的な発展を遂げてきた。

江戸時代の日本では、書法の学習と普及の過程で、「江戸文字」と呼ばれる一般的な文字の範疇とは異なる文字形式が革新された。この文字の中で「角字」は、この時代に特有な趣味、嗜好などを体現しており、この時代の独自の江戸文字が生まれたことは、江戸時代の日本の篆書書法の展開を示す重要な歴史である。

## 一、「江戸文字」の起源

日向数夫は『江戸文字』の「序にかえて」に「一口に江戸文字といえ、勘亭流とその亜種である寄席文字、浄瑠璃文字、それに籠字、角字、などがあげられる」と記し、江戸文字は江戸時代に色々な看板の文字となった。

「勘亭流」とは、芝居文字であり、落語や歌舞伎などの看板や番組表に用いられる字体である。この字体は岡崎屋勘六によって設計されたものであり、彼の別号勘亭であることから名付けられたものである。「寄席文字」、すなわち橋流は客様の目を引くため、筆画が太く、勘亭流と提灯文字の特色を合わせている。ポスターやチラシ、千社札に使用されている。「浄瑠璃文字」は、室町時代の『浄瑠璃姫物語』の浄瑠璃から名付けられたもので、この台本の書く書体は、三味の撥音のように滑らかであった。籠字とは、筆画が太く、使う書体は楷書や篆書が多く、「双鉤墳墨」があり、反対の「双鉤墳墨」を記入することもある。

角字は、筆画が極太い四角字体であり、篆書に由来しており、印章や商標などに用いられることが多く、九疊篆と極めて類似する。方形枠で完成し、横が平で縦がまっすぐ、布置章法が均一で、筆画の太さが同じ、周りを満たしている。しかし、九疊篆と異なり、角字は書くために用いられることがあり、九疊篆の方は印章に用いられることがあって、形成過程が少し違うことがある。

## 二、「角字」と「九疊篆」の比較

中国の唐代の墓誌には九疊篆が現れているが、大きな展開には至っていない。宋代になると、疊篆は官印の文字となり、道教の印章も疊篆を使った。道教印が官印を模しているのと、官印が道教印を模しているのと、両方一つの起源があるものの三つがあり、最後の一つの起源がもっと事実合っていると思う。道教は疊篆を使い、法力があり、魔物を除去することができる。官印は疊篆を採用しており、神秘だけではなく、道教の法力を意味していると同時に、吉祥の意味もある。

日本の角字は、江戸文字の一つとして、政府や貴族などに用いられることが多く、権力や地位の象徴である。その好みの由来を探ると、天平四年（七三二年）に聖武天皇が制定した礼服や、中国と類似した双喜の文字など縁起の良い文字の直線的な組み合わせで飾られているが、体系化されておらず、江戸時代には角字が生まれ大規模に使われた。

次に、角字と九疊篆を比較して分析し、角字の「平」（図1）は、単字の筆画が非常に簡単であり、九疊篆に比べて字の周辺に余白が残ってお

らず、太い筆画で埋め尽くされているのに対し、九疊篆の印章は、陽刻（図2）も陰刻（図3）も、周囲に余白が残っている。「平」の角字と九疊篆の上半分の処理方法が一致していたが、角字の縦画が頭を出し、伝統的な篆書の扱い方を変えた。下半分は空白を埋めるために、両方の縦画を3回折り曲げ、角字は下半分を全体として画折りしているのに対し、印章の九疊篆の陰刻と陽刻は、ともに中央線を軸に対称的に折り畳まれており、字の全体は折り畳むと同時に均一に見える。

また、角字の「八」（図4）のように、この文字の形態は、九疊篆（図5、図6）の処理方向と一致しており、全体が左右に二分されており、筆画も余白も十分に対称的であるが、筆画の折り方が異なる<sup>③</sup>。各部分は上から下にそれぞれ8回折るが、角字の変化が多く、装飾性があり、九疊篆は対称性を重視しており、折り目ごとに一致する。一方、折畳みの回数を見ると、中国でも日本でも縁起の良い数字「八」が使われていることがわかる。

角字の「大」（図7）は、上半分の処理方法が九疊篆（図8、図9）とほぼ一致しており、畳む回数および形状は同じである<sup>④</sup>。下半分はいずれも中央線を軸として対称的に処理され、それぞれ5回折り畳まれているにもかかわらず、九疊篆の下半分は、上半分の折り方や形状と同じであり、角字は上半分と相対して折り畳まれている。

以上の分析から、角字は中国の印章文字である九疊篆の影響を受けて、その筆画の布置方式を継承し、その上で改良を加え、独自の書き方を形成した。また角字は、江戸時代に広く応用されたが、この時期に中国の篆書が発展し、普及したと深い関係があることが明らかであろう。



図1 角字「平」



図2 陽刻「平」



図3 陰刻「平」



図4 角字「八」



図5 陽刻「八」

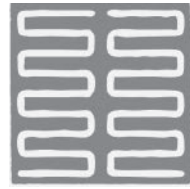


図6 陰刻「八」



図7 角字「大」



図8 陽刻「大」



図9 陰陽「大」

## おわりに

中国篆書書法史の中で、清代は唐代に続いて篆書復興のもう一つのピークとなった。篆書書家の一部は伝統を継承し、一部の書家は清朝の学問復古の基礎のもとに、篆書書法の発展に新たな活力を注入し、独特の篆書スタイルを創造した。そして、江戸時代の日本に大きな影響を与えたのである。

江戸時代の日本と中国は、中国から長崎への貿易船による海上貿易を頻繁に行い、唐船を通じて、多数の篆書書法に関する書籍などを日本が受け入れることになった。文献面から言うと、日本は、中国の篆書書論を抜粋して収録し、それらを参考にしたりとはいえ、単なる模倣ではなく、書家や学者による個人的かつ個性的な見解が増大し、日本独自の理論が生まれたといつてよい。

芸術面からいうと、江戸時代の日本の篆書書風と中国のそれとの異同を比較検討すると、日本の書風は、中国篆書書風の影響を受け、主要な特徴を継承し、その基礎の上に清代篆書書法の新しい特徴を受容した。それによって、日本独自の江戸文字が生まれ、その中で「角字」が代表的な文字として、中国篆書書法を十分に咀嚼して展開することができたといつてよい。

注

- ① 日向数夫、『江戸文字』、グラフィック社、一九七〇年四月、第六頁。
  - ② 日向数夫、『江戸文字』、グラフィック社、一九七〇年四月、第二三八頁。
  - ③ 日向数夫、『江戸文字』、グラフィック社、一九七〇年四月、第二三八頁。
  - ④ 日向数夫、『江戸文字』、グラフィック社、一九七〇年四月、第二四二頁。
- \* 曹悦・関西大学大学院東アジア文化研究科・日本学術振興会特別研究員

DC1